

キルタイム・オンライン
無能少年は受け継ぎし神スキルで電腦世界を無双する

渡葉たびびと



ファンタジア文庫

2943

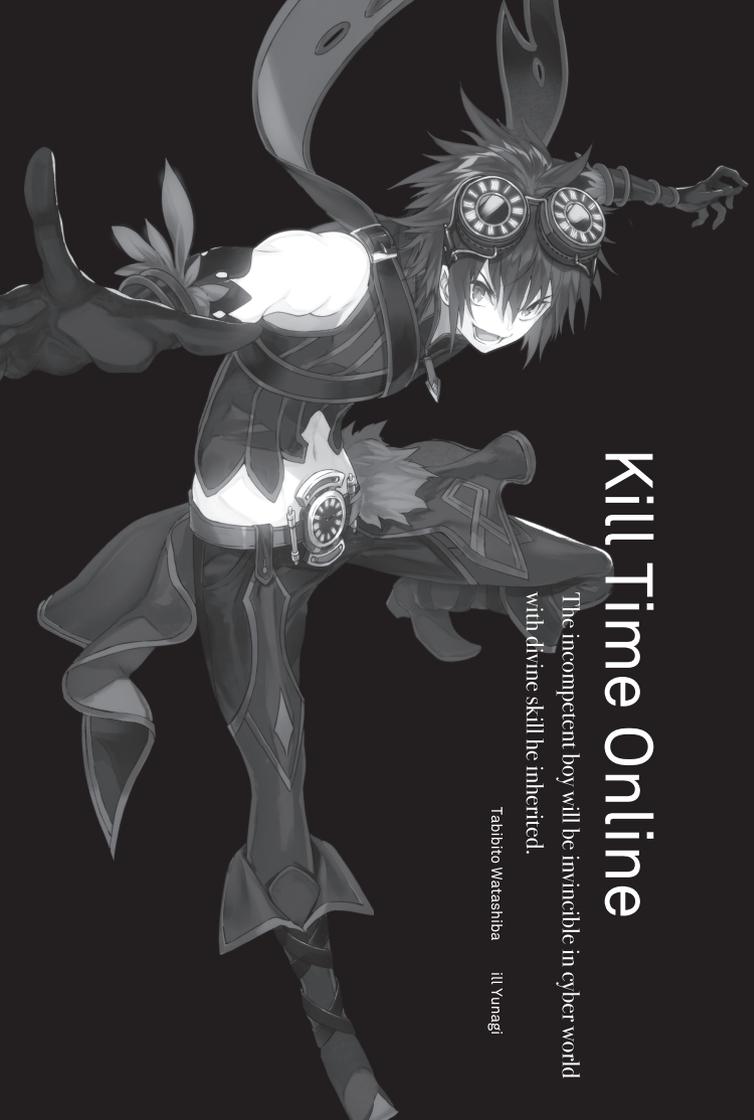
口絵・本文イラスト 夕薙

Kill Time Online

The incompetent boy will be invincible in cyber world
with divine skill he inherited.

Tabibito Watashiba

ill Yunagi



Prologue 何も贈られなかった少年

人は、生まれながらに平等じゃない。

誰もが知っている当たり前のこと。

特に才能というやつは残酷だ。

天才のことを、英語で「ギフト」ということがある。

才能というのは天からの贈り物というわけだ。

当然、貰える人と貰えない人がいる。

俺も小学生になる頃にはわかってきた。

——「この俺、神里柊はたいしたことのない人間だ」ということ。

勉強が特別できるタイプではないらしいことがわかった。

運動が特別できるタイプでもないらしいことがわかった。

絵も、音楽も、特に秀でてはいるわけではないらしい。

友達も特におらず、コミュ力なんてあるはずもない。

結局俺には何にもなかった。

未来に希望は見えなかった。十年後、二十年後……自分が幸せになるイメージはまったく持てなかった。

きっと世の大人たちのように、毎日グチを言いながらギリギリ平凡な暮らしを送るのがせいぜいだろう。

ああ、今回の人生はハズレを引いたってことなんだろうな。そう納得して諦めるしかなかった。

だが。

文明の発達したこの時代に、それは突如現れた。

世の大半の人が「持たざる者」。

そんな諸行無常な現実を、変えてしまいかもしれないゲームが——！

Kill timeという単語がある。英語で「暇つぶし」という意味である。

そのゲームは「世界最高の暇つぶし」を名乗って市場に登場した。

——「すべての退屈を殺す」

そんな挑戦的なキャッチコピーとともに。

〈キルタイム・オンライン〉

そのゲームは、最新にして最高の、体感型VRゲームだ。

極限までリアルなワールドは、現実世界と並ぶ第二の世界と呼ばれるほど。

プレイヤーは自らのアバターを操作して仮想世界にダイブし、第二の世界で第二の人生を送るのだ。

〈キルタイム・オンライン〉は戦闘ゲームでもあり、VR空間での戦いを楽しめる。

超人的な力を持つ戦士になりたいという願望も、ここでは容易く叶えることができる。

戦闘ゲーム要素、アバター着せ替え要素、動画配信機能、SNS機能などが高度に融合した〈キルタイム・オンライン〉は、ゲームとはいうものの、実態としては総合電脳プラットフォームとも呼ぶべきものになっているのだ。

そして何より特筆すべきは、ゲーム開始時に全員に与えられるスキル……「ギフト」の存在。

ギフトは一人一人にそれぞれ設定される強力なスキルで、ひとつとして同じものはない

のだという。

それはプレイヤーの脳波を読み取り、本人の性格や嗜好、適性から計算して設定される。つまり登録した全員が「自分だけの」能力をもってゲームを開始することになるのだ。そんな革新的なシステムとともに、Kill Time Online……通称KITOは世に出た。すべての人間に能力を与え、理想的に作られた仮想世界を与える。人々は思うようにいかない今の時間をぶっ殺し、新たな生活を手に入れるのだ——！

と、いうようなことを、俺は興奮して母さんに語ったものだ。

「どんな人間にも、自分だけの能力が与えられる。つまり！」

ちよつと普段出さないくらいの大きな声で。

「全員が天才になれる、というわけなんだ！」

まあ俺の説明もへたくそだったし、母さんも半分くらいしか理解してなかったと思うけど。

それでも母さんは笑って聞いてくれた。

日頃の「あー、天才に生まれたかったなー！」という俺の声も耳に入ってたろうし。

「はいはい、わかったわよ」

友達もロクにいない俺の楽しみが、ゲームくらいしかないのも母さんは知ってる。

だからだろう、決して裕福じゃない家だったけど、許可が出た。

実家の店の手伝いをしたら、バイト代を出す。それで買いなさいと。

「よおーし。最短で貯めてやるぞ。RTAだ！」

この時の俺は珍しいくらいポジティブだった。

希望に満ちてた。俺も天才になるんだ！……ってね。

そうして運命の日はやってきた。

「ひい、ふう、みい……よし、十回数えたけど、お金は足りてる！」

本当は三十回数えていた。

とにかく……ソフトとハード、ヘッドセット等の装備一式。

つまり、KITOが買えるのだ！

数か月かかったせいで他の人からはだいぶ出遅れたけど。

この時、KITOはとっくに大ブームになっていた。

「天才に生まれたかった！」誰もが抱くであろうその願いを、KITOは叶えてしまっつ。

人々は「自分にはどんな能力がもらえるだろう」とワクワクしながら登録し、ゲーム人

口はまたたく間に増大した。

「すぐに追いついてやるぞ……何しろ、俺にだって『ギフト』がもらえるんだ！」

もうこの日の俺は活発だった。同じ人物と思えないくらい、何度もチェックした売り場へスマーフトに向かい、最短距離でスマーフトに商品を持ってレジにドン。

で、そこが違う売り場のレジだったので大慌てして、すべてのスマーフトを失いつつ。隣のレジで会計、即、帰宅！

「おお……本物だ……！」

ドキドキしながら開封すると、そこには間違いないくキオのセット一式。

自分の部屋でセッティングしながら、俺の心臓は人生で最高に脈打っていた。

「もうすぐ……もうすぐ……！」

ここでなら、何らかの能力が手に入る。ただ一人の「何者か」になれる。

ああ、まさに今日は運命の日だ。

今回の人生はハズレを引いたってことなんだろうな——リアル人生ではそう結論していた俺が、そんな結論を投げ捨てて第二の人生を生きられる！

ゲームくらいしか好きなものがない、何ひとつ他人に誇れない俺が——

そんな俺が、ゲームの世界で生まれ変わる！

そして。そして——

すぐに大ブームとなったキオでは、己のギフトを活かして戦い、勝利することで賞金を稼ぐ、戦闘の専門家までも現れてきた。

戦神、と呼ばれる彼らは、いわばeスポーツ選手にしてプロゲーマー。今やあらゆるゲーム好きの憧れの対象として、世界のトップで戦い続けている。

「目指すはもちろん、戦神、だ……！」

俺はそこまで決めていた。

己の能力で勝ち抜く戦士に。ゲームの戦いを人生として生きるプロに、俺はなるんだ！そうして、準備は整った。俺は緊張とともに、電源のボタンを押した。

「さあ、いくぞ。スイッチ、オン……！」

もうすぐだ。すぐそこだ。

ああ、やっぱりゲームは素晴らしい。始めてもいないのに俺は思う。

人生が変わるかのようなワクワクを、未来に希望を感じさせてくれる。

キルタイム
K.T.Oはロード時間もほとんどなく、驚くほどスツと起動した。

そして目の前に……新しい景色が広がる。第二の人生と呼ばれる世界が。

「……が……キルタイムの世界……」

正直、その時点でちよつと感動してしまった。いや早すぎるだろう。

自分の姿を確認する。飾りけのない初期アバターだが、俺には輝いて見える。

とはいえ、まあ、デザインなんかは後で好きに変えればいい。

それよりも。なによりも――

今すぐ確認しなきゃいけないことがあるだろう。

メニュー欄が何か所、光っている。ゲーム側としても確認を促してらんだろう。

そうだ。ステータス画面だ。ほとんど反射で選択する。

つい一度、目を閉じる。はやる気持ちを抑える。気が付けば呼吸が浅くなっている。

大丈夫。夢じゃない……現実だ。あとは、この目で見るだけ。

「さあ、どうだ……!」

目を開ける。見るべきは「ギフト」の欄。決まってる。

ほやけた視界が次第に像を結ぶ。

さあ果たして、そこに見えたものとは。

俺の目に映った、俺の才能とは？

そこには――

（無）
（エンフティ）

たったそれだけ、書いてあった。

「……は？」

専用機器のゴーグルをつけたまま、思わず声を漏らした。

「どういうこと？」

目を閉じて、開く。同じことが書いてある。

ステータス画面を一回閉じる。開く。ギフト欄を確認する。

――（無）（エンフティ）。変わらない。ちよつと意味がわからない。

「そ……そういうギフトなのかな……?」

イヤな予感がした。背中を冷たい汗が一つと流れた。

ギフト欄には、スキル名の他に、効果の説明などがあるはずだ。

その説明スペースは——空欄だった。まっさらだった。

ゾツとした。血の気が引く感覚。だが逆に体温はドツと上がった。

「うそ、何かのバグ……? いやないよね……?」

いやいやいや。ありえないでしょう。ウソだろう。

俺はこの後、運営にも問い合わせしてみたのだが、なぜかハッキリとした返事はもらえなかった。

身体を動かしてみても、能力の発動を念じてみても、ウンともスンともいわず、恐ろしいほど何も起こらない。まるで超能力ごっこをする少年のように。

——とにかく、何をしても結論は変わらなかった。

まさしくこの日は俺にとって運命の日だった。

信じられないことだが……俺には。

ギフトが、なかったのだ。

最初、俺は認めなかった。認めたくなかった。

だって当たり前前だろう? あれほど何か月も楽しみにしていた、俺だけの才能。能力。これからはそれを頼りに生きていくんだと思っていたものが、欠片もなくて——。

俺はわけもわからないままフィールドにダイブし、アバター同士のバトルに挑んだ。他にできることがなかったから。

だがそこで負けて、負けて、負けて、負けた。

強力な戦闘スキルであるギフトを使ってくる相手に、丸腰では手も足も出ない。

「オラ、何度やっても同じだよ! ギフト発動……(スマッシュ)！」

すさまじいオーラをまとった拳を叩き込まれ、俺は転がった。

ギフトを発動した瞬間、拳のスピードも威力も、常識を超える。

回避も防御も、できるはずがない!

わかっていたことだけど、俺は挑むたびに負けた。

……そして、そのたびに嘲笑された。

「一回も攻撃できてないじゃないか」

「行こうぜ、タクマ。こんなの相手してもしようがねえよ」

「もう来んなよ、サンドバッグと試合しても面白くねえからさあ!」

ぐつと、唇を噛みしめる。

ああ、ちくしょう、なんてことだ。

勉強もできなくて、運動もできなくて、絵も音楽も、コミュニケーションもできない、何のとりえもない神里柊は。

たつたひとつ好きだった、ゲームの中でさえ——「持たざる者」だったのだ。

ああ。ああ。

拳を握る。許したくなかった。

「俺に何も無い」っていう、人生で一度認めたはずのその事実を、ゲームの中でも認めるなんて……どうしても、許せなかったんだ。

そんなことがあるか。あつてたまるか。

「ちくしょう、ちくしょう。ふざけんな……!!」

口について言葉がこぼれた。どうしても我慢ができなかった。

嘲笑するプレイヤーたちに見下ろされたまま、俺は呪詛を吐き続けた。

「なんでだよ。どうしてだよ。ただ一つの才能が贈られるんじゃないのかよ。それで戦えるんじゃないのかよ。俺は、俺は……」

俺は「**NO**」が好きだったんだ。素晴らしいと思ったんだ。



このゲームに希望を感じたんだ。光を見たんだ。

「俺は……!!」

なのに。なのに――

「戦神に……懂れてたのに……」

絞り出すような言葉。

しかしそれも、今は空しく響くばかり。

それに返されたのは……さらなる嘲笑だった。

「ギャハハハ!! 笑わせるぜ」

「野良バトルで一勝もできない奴が、戦神?」

侮蔑の言葉。ほとんど混乱したままの頭で、俺は何かを言い返そうとする。

「目指す、ハズだったんだ……これから特訓して、お前たちだって……いつか、倒して。」

一歩ずつ、近づくハズだったのに……! それすら、努力すらさせてもらえないのか

……?」

「倒す? お前が、俺を?」

だがその次の言葉が、この時の俺に一度、とどめを刺した。

「どうやって?」

この言葉に、俺は何も返すことができなかった。

「努力? しなくていいだろうよ。どう見ても無理なんだからさア!」

どう見ても無理。その通りだった。

今現在、俺がこいつを倒す方法は、存在しない。

無慈悲。不条理。現実と何も変わらない、冷たい事実。

それが「持たざる者」の、情け容赦ない現状だった。

――こうして心折れた俺は、あれほど恋焦がれたKIOから距離を置くことになった。なんてことだろう。取りつかれたようにお金を貯めてた日々が遠い昔に感じる。

しばらくログインはしていない。というか、触れてもいない。

見なくてもいいように、せっかく買ったセットを棚の奥にしまつて。

閉め切った押し入れに背を向けて、俺はわざと違うゲームをやった。

音ゲー、格ゲー、シューティング……KIOを忘れるために、思い出さなくてもいいように、逃げるようにのめりこんだ。

諦めるしかなかった。いくらため息を吐いても、ギフトが手に入るわけでもない。悲しくて、悔しくて、けれど、どうすることもできなくて。

「憧れの戦神たちの試合を動画で観戦するのも、なんだか胸が痛くなって、しばらくできなかつた。」

どうしてあそこに、俺がいらないんだろう——そんな気持ちが頭をよぎる時、ズキンとどこかが痛む。

そうして、持たざる俺はみじめな諦めの時を過ごし続けていた。特に救いはなかった。

一年経ち、二年経ち……身体が少しずつ腐っていくような日常を、俺は受け入れ始めていた。

だが、そんなある日だった。

もう一度、運命の日がきたのだ。

南風の強い、春の暖かな日のことだっただろうか。

——天堂絵礼奈が、俺の前に現れたのは。

Page 1 『神の眼』と来訪者

俺は朝という時間があまり好きではない。

もちろん単に眠いつてもあるが、他にも色んな理由がある。

まず朝の仕事はめんどくさい。

最初に店の掃除をするわけだが、狭いとはいえ一人でやるのは中々しんどい。

うちの店は建物も、置いてるゲーム筐体も古いもんだから、拭き掃除してもどこか黄ばんだままで、綺麗になったのかどうかよくわからん。

棚に飾ってあるささやかな数のトロフィーも、ほっとくとすぐに埃をかぶる。

まあ過去の栄光なんてそんなもんかもしれない。

置いとくだけじゃ何の役にも立ちやしないし、どんどん色あせて見栄えは悪くなる。

過去に何があるうと、今の俺にできるのは掃除くらいだ。

そして、そうやって淡々とした朝を過ごしていると、ふと思うわけだ。

——ああ、冴えないなあ。

いやホント冴えなすぎてビックリする俺の日々。色でいえば灰色。リア充じやうの人たちがどんな一日を過ごしてるのかは想像もつかないけど、グレーやセピア色じゃないだろう。もつとこう何かカラフルなんだろう。

俺は朝、こうして掃除しながら考えるのだ。
今日もきつと何もないだろう。

何一つ心動くこともないまま、ただただ平坦へいたんに時間は過ぎて、昼になって夜になって。一日じゅう仕事しかしてないじゃんって気がついて。

このまま寝てたまるかって、負け惜しみみたいにちよつとだけゲームして寝る。

そんな未来が見通せてしまう。朝の時点で感じてしまう。
だから、俺は朝が憂鬱ゆううつなのだろう。

これはどうにもならない。なるもんじゃない。それが俺の人生なのである。ため息をつきながらモップを動かす。テキトーだ。前もよく見ちゃいない。が、それは良くなかった。カン、とモップの上部が何かに当たった。

乾いた音を立てて何かが落ちてくる。次の瞬間、目の前が真つ暗になっていた。

「——おわあっ!？」

間拔まぬけな声をあげて、視界を遮さかった物体を確認する。

……なるほど、バケツが落ちてきて頭にかぶさったワケね……。

ハハハ。真つ暗だ。

お先も今も真つ暗な、ただのゲームセンター店員。

それがこの俺、神里柊かみさとしゆうの現状である。

さて。そんな朝は終わり昼になる。

この時間の店番は暇ひまといえは暇だ。まだマシな時間といえる。たとえば客がいなければこんなこともできる。

俺はタブレットの画面をタップする。

——画面の中で天使てんしが躍おどる。

純白の少女アバターは舞うように相手の攻撃をいなす。

そして長い銀髪ぎんぱうをなびかせ、流れるように相手の背後へ。

スラリと長い脚あしが伸び、綺麗な回転蹴げんりが決まった。華麗かれいな一撃KO。

一連の動きは、目で追うことすらできないほどの神速。

思わずつばを呑む。あんなふうには戦えたら、どんなにいいだろう。タブレットで K.T.O の試合動画を流しながら、俺は今日も適当に休憩していた。一時期は見るだけで泣きたくなるから避けていた K.T.O の動画だけど、見始めるとやはり面白くて、徐々に見るようになり……気づけばファンになっていた。

悔しいけども、やっぱり戦神って、いいもんなんだよ……。

俺が今日も追うのは、K.T.O 最速と言われる戦神、『不可視の天使』。

ここしばらくは戦いに現れなくなったが、今でも俺は彼女こそが最強だと信じている。圧倒的な疾さ。美しすぎる戦い。あまりに完璧で、憧れずにはいられない。

「……あの」

見入ってしまった。魅せられた、と言ってもいい。

俺の視線は画面に釘付けだ。

「すみませーん」

何しろ彼女は「アリーナ」でもナンバー1だったことがある戦神だ。

今では伝説の存在になってしまったが、復帰を望む声は多い。

「すみませーん、店員さん？」

もし彼女に会うことがあれば、是非とも聞きたいものだ。

なぜ、急に姿を消してしまったのか——ん？　なんか騒がしいな。

「……あの！　返事してもらえますか!？」

「んあ？」

顔を上げた俺は、思わず間抜けな声を出した。話しかけられていたらしい。

「す、み、ま、せ、ん。店員さんですよね？」

「ああ、はい」

いかんいかん、完全に油断しきっていた。

店員かと聞かれれば、ハイと答えるしかない。だって俺は店員なのだから。

客を無視してタブレットでゲーム動画を見ていたが、店員なのである。

……後で店長に怒られる気があるなこれ。ごめん。

「ちょっと、聞きたいことがあるんですけど」

「お手洗いなら、あちらですが」

「……トイレじゃないですよ!」

目の前の少女は顔を赤らめて身を乗り出した。顔が近い。

そう、話しかけてきたのは少女だった。高校生くらいだろうか？

整った顔立ちに長くて綺麗な髪。なぜか既視感を覚える。どこかで見たような……？

いやいや、と思い直す。今まで生きてきて、こんな美人と会話したことなんてないだろ。

「私が聞きたいのは……！」 あの、ここに神里柊がいるって聞いたんですけど」

少女は息をととのえて聞き直した。俺は二度びっくりした。

「えっ、俺？」

「そう、神里——ん？ 『俺』？」

「俺」

「あなたが」

少女がこちらに指をさす。俺も自分に指を向ける。そう。

「神里柊は、俺ですが……」

「えッ」

美人は一歩うろたえた。なんだ。何かまずいの？

「うそ、こんなに若い……？」

「そちらほど若くないと思うけど……」

「もつとこう、凄^すみとか……これがあの伝説的チャンピオン——？」

「チャンピオン……ああ、なるほど」

その単語で俺は理解した。きつと噂^{うわさ}を聞いてきたんだろうな。

「すみませんね、凄^すみとかなくて。ラーメン屋の親父^{おじ}みたいに、腕^{うで}組みでもしてたらよかったでしょう？」

「べ、別にそういうことじゃないわよ。……まあ、大事なものは見た目じゃないわ」

少女はウインクして指を立てた。さも重要なことを言うかのように、

「腕よ」

「え、やっぱ腕？ 腕組みしたほうがいい？」

「その『腕』じゃなくて、ゲームの実力のことよっ！」

彼女は髪を乱して声を荒^あらげた。

黙^{だま}ってればクールなのに表情がごろごろ変わって面白い。

「……うん、まあ、そうですね。わかつてはいるんだ」

「ホントにわかっているの……？」

「俺の名前なんて、それ以外で知られるワケがないから……」

そう。俺の人生にはひとつだけ「ほこりを被^かつたトロフィー」がある。

俺……神里柊は、幼い頃から、親の経営するこのゲームセンターですつと遊んでいた。

最新ゲームであるKITO^{キルトイム}にこそ愛されなかったものの、旧来の各種ゲーム……シユエテ

イング、音ゲー、クレーン、そして特に格闘ゲームについてはかなり自信がある。そして K10に見放されて……やめてからは、さらに狂氣的にのめり込んでいた。現実の何もかもを忘れるために。

そのせいか……いくつかの大会で優勝し、賞金をもらうまでになったくらいだ。なので、こんなぼんやりした暮らしにもかかわらず、幸いあんまりお金には困ってない。それで、俺の実力はゲーマー界隈ではちょっと噂になっているらしい。

K10の流行で、どちらかというとな今はもうレトロゲー扱いだけど。

「わざわざ探して来るなんてすごいですよ、マイナーゲーの優勝者なんて……」

「あなたが思ってる以上に、噂は大きいのよ？」

「へええ、なんか怖いなあ。それで……その神里移へのご用件とは」

「ああ、そうそう。それよね」

少女は少し髪を直すと、クールな笑みを取り戻し、まっすぐ俺を見た。

「……戦いにきたの」

「はい？」

彼女がようやく告げた目的は、ちょっと意外だった。

「お、俺と……？」

でも、俺がまぬけな声で聞き返しても彼女の顔は変わらなかった。

「そうよ。ゲーマーとしてのあなたに用があつてきたんだもの」

「てっきりレトロゲー雑誌の取材なんかかと」

「しゅ、取材？ ……しないわよ。私の目的はひとつ」

少女はあらたまつて言い直した。

「私と……一戦、お願いしたいの」

「えー……そ、そう。仕方ないなあ」

俺はわずかに間を置いてうなずいた。

そして目の前の少女——そういえばまだ名前も知らないな——とともに移動した。

俺と少女は格闘ゲームの筐体を挟んで向かい合う。

「三本先取でいいかしら」

「ああ、こちらは何でも」

ルールの提案に応じ、椅子に座る。

キャラクターを選び、そして……試合が、始まった。

「見せてもらうわ、あなたの力」

少女は実際のところ、強かった。
何より反射神経が鋭い。

最速のスピードでキャラを操り、コンマ以下の動きにも対応してくる。
だが、俺にはわかる。

ジャンプ、回転蹴り、着地から中段。次は――

「下段蹴り」

「えっ!？」

俺はカウンターでゲージ技。

――K.O.!!

まず、俺が一勝。

「……まだよ」

「もちろん」

二本目。彼女は飛び道具で牽制、距離を取って俺を誘う。

俺は誘いに乗って接近。すると少女は待ってましたとばかりに――

「投げ技、だよね」

「……うっ」

また、彼女は俺の言った通りに動いた。

俺は一瞬止まる。投げ技は空振り。その際にコンボを叩き込む。

――K.O.!!

「二勝、と」

「……次よ!」

三本目。少女が中段パンチから仕掛けてくる。

それに合わせて、俺は口を動かす。

「キック、下段、ジャンプ、ガード、飛び道具……」

俺の言葉にわずかに遅れて、少女のキャラが同じ動きをする。

そして、俺はそのすべてに、的確に反撃した。

「な……!! こ、これが」

体力ゲージをゴリゴリ削られながら、少女は驚愕する。

「神里柊の『神の眼』……!!」

――K.O.!!

「はは、久しぶりに聞いたかも、それ」

俺は息を吐いて席を立った。

「ええと……三本取ったね」

「予想以上……だわ」

格闘ゲームで最も重要な要素の一つに「読み合い」がある。

ジャンプ、通常技、飛び道具……いくつもある選択肢から、次に相手が何を選ぶか？ それを一瞬で予測し、自分はそのに対応する動きを取る。

何百試合もこなすうちに、俺の予測はどんどん正確に、そして速くなっていった。

一瞬よりも短い時間で、相手の未来の姿を視る。

俺のその様子を、この店に通う格闘ゲームーたちは『神の眼』と、そう呼んだ。

「流石が……『外の世界』のトップゲーマー」

席を立ち、スカートの埃を払いながら、少女はそう言って少し笑った。

「もちろん勝てるとは思っていなかったわ。でも……私も、格闘ゲームを少しは勉強してきたつもりだったのね。動きをすべて読まれる……なんて」

「……ま、まあ」

「いや、それでこそ期待通り、か……。やつぱりあなたは『こちら』でも確実に通用する」
負けた彼女は、なぜか悔しがつている様子はなかった。

ただ、それはそれとして、何か言いたいことがあるようだった。

「でも……ひとつ、いいかしら」

少女は真剣な表情で、こちらに問いかけた。

「今の試合、楽しかった？」

「……え？」

「なんか勝ったわりにスカツとした顔、してないし」

「そう……かな。確かに喜んだりはしなかったけど……」

言われて振り返ってみる。昔ほどスカツとしてない……のかな。どうも最近には心クモの巣がはったみたいになって、いろんな感情が薄味になつて。それが、目の前の少女にはわかったというのだろうか。

「気を悪くしたなら申し訳ないわ。ただ、もし、あなたが『ゲームを楽しめない人間』だったなら——」

彼女はそこまで言って、少し黙った。

「そうか、おかしい……な」

俺はつぶやいた。

「俺は、ゲームが好きはずなのに。それしかないはずなのに」

「好き……？ 本当に？」

そこにも、少女は疑問を投げかけてきた。それに俺は少しだけムツとした。

「好き、だよ」

むきになって少しずつ思いつい出しながら、自分の考えを口にする。

「俺は勝とうとして、勝った。『勝ち負けを気にして必死にやってる』時点で、それはもうゲームが好きってことだと……思うんだ」

「……………」

「今、俺はそれをやった。だから……」

ゲームは食事や睡眠とは違う。

生きるために必須のものではない。

じゃあ、なぜゲームをするのか？

勝てば嬉しい。負ければ悔しい。

それだけのために必死になって工夫もするし、努力もする。

そんなことに時間をかけてしまう。貴重な人生が簡単に吹っ飛ぶ。

それでも、なぜ？

——好きだから。それ以外にないじゃないか。

「確かに最近、ちょっと腐ってるけど……俺は、ゲームを愛する『ゲーマー』なんだ」

「……………ふふ」

すると、俺の言葉を聞いた美少女は、さらにもう一度笑った。

「やっぱり、あなたしかいないわ」

意外な言葉が返ってきた。俺しかない？ 何が？

「ごめんなさい、ここに来た目的……あなたと戦うため、だけじゃないの」

美人はこちらに一歩近づき、俺の手を取って目を見つめた。

えっ近い。鼓動がわずかに跳ねる。

彼女の息づかいまで伝わる。少女は呼吸を整え、その真意を口にした。

「神里柊……あなたを誘いにきた」

「ん？ 俺を？ 何に？」

「私と——〈キルタイム・オンライン〉に来てほしいの」

「……………へ？」

少女の申し出に、俺は一瞬脳が停止した。

「いきなりかもしれないけど……ね、「緒にさ！」

少女が細い両手に力をこめる。手のひらから熱が伝わる。だからそういうのは慣れてないんだって！ 脳みその中から思考が奪うばわれる。と、とにかく何かリアクションしなくては。

「キルタイム……って、あの？」

「そう。ゲームーたるもの、さすがにご存じよね？」

少女は微笑ほほえんでいる。もつともだ。ゲームーを名乗る者ならご存じのはずだ。が、俺としては軽々しく聞ける話でもない。

「そりゃ、もちろん知っては……いる……けど」

〈キルタイム・オンライン〉。知っている、どころではない。

忘れもしない。何をどうしても勝てなかつた過去。

自分が「持チたテざる者」にすぎないと、突きつけられた場所——。

「一緒に……って、それでいったい何をするのさ」

「んー。来てみてのお楽しみ……じゃダメかな？」

「だ、ダメじゃないかなあ!? 誘ユっておいてそれは！」

「ふふ。確かにそうね——」

少女ははぐらかすように笑い、手を後ろに組んでくると回った。

スカートがふわりと浮うかんで花のよう。可憐かれんな仕草に思わず目を奪うばわれる。

が、彼女はそれすら計算に入れてるように思えた。

「というか、ごめんなさい。私、名前すら言いってなかつたわね」

「そう、それもそうだし……」

「——天てん堂どう絵え礼れ奈な」

「え？」

「私の名前です。えれな、とでも呼んでももらえれば」

「な……なんだって……？」

彼女がただ名前を言っただけで、俺は言葉を詰つまらせる。

それには理由がある。

「キキルルイイム……えれな……」

ゲームの名前と、彼女の名前。

この二つの名が結びつく場合、ひとつの意味を持つ。

「エレナ——君がまさか、『そう』だっていうんじゃないだろうな」

「……あはは」

目の前の少女はまた笑った。肯定こうていか、否定ひていか？

本当ならば、俺としては一大事だ。

アバター名「エレナ」。それはキルにおいて最強とも噂される――

最速の戦神『不可視の天使』。彼女の名が、エレナだ。

圧倒的な疾さ。美しすぎる戦い。あまりに完璧で、憧れずにはいられない。

俺にそうとまで思わせた雲の上の存在、それが「エレナ」。

俺の疑問に対し、天堂絵礼奈は声のトーンを落とし、真剣にこう言った。

「そうね。その通りよ――」

「！」

「――と言ったら、あなたは信じる？」

おいおい、と俺は拍子抜けした。

「まだはぐらかすのかよ!？」

「そうとしか言えないの。キルでの私は『エレナ』……これは『本当』よ」

彼女は考えるように顎に指を当て、

「でも、今の私には、証拠がない。名前くらいしか言えないもの」

だから――と、絵礼奈はまっすぐにこちらを見た。

「その名前を信じてもらうしかない……んだけど」

「うーん」

「あえて大げさに言おっかな。元アーリーナ一位、最速の戦神、『不可視の天使』――登録

名「エレナ」から、アナタにお願いします」

「……………」

「『外の世界』の伝説――『神の眼』神里柀！ 私と来て！」

俺は圧された。

彼女のきらきらした瞳、張りのある声、美貌、カリスマ性のあるオーラ。

信じてもらえるかもわからない自分の肩書を、自信たっぷりに言い切る度量。

もし、もし本当の本当に目の前の少女が「エレナ」で、俺を誘っているのだとしたら。

そんな胸躍る話はない。ついさっきまで動画で試合観戦してたヒーローだぞ？

「……」

「キル……タイム……」

口をついてこぼれる、ゲームの名。

俺には簡単にOKできない理由がある。

「俺は……」

あそこは俺の場所じゃなかったから。

見ないようにすることで、忘れようとすることで今までなんとかやってきた。他のゲームで、俺はやっていける。なけなしの自信はそこで保てばいい。

頑張がんばって見ないようにしていたものを、今さら目の前に出されても——どう受け止めればいいかわからない。

「あれれ。意外とすんなり承諾しょうたくしてくれないのね。何か問題でもあるのかしら」

「そりゃ、いきなりすぎるし……それに俺は……」

ももぞと躊躇ためらう。突然とつぜん目の前に現れた選択せんたく肢しをどう選んでいいかわからなくて、俺は

「あ、そうだ」

そういえばまっとうな理由を思い出した。

「店長の許可なしには、難しいんじゃないかなあ」

「……店長？」

「店長……俺の母さんだけど。KITOキルトイムやるって、けっこう時間とる話だよ。俺にはこの仕事もあるから、簡単には——」

「——わかりました」

「ん？」

絵礼奈は顔を上げてまっすぐ前を見た。結論が出た顔をしている。

何がわかったって？

「お母様に会わせてください」

「えっっ」

——その後。俺たちは店の奥へとやってきた。

関係者オンリーの、事務とかをするための部屋だ。

そこにこのゲームセンターの店長、すなわち俺の母がいるわけだが。

その母は、今。

「しゅ……しゅ、しゅしゅしゅしゅしゅ」

機関車みたいな声を出しながらうろたえていた。何？ 発車するの？

原因は、これである。

「——柘が、女の子を!？」

うん、まあ気持ちはわかるよ。

小、中、高と、女の子と会話することすら珍めずしかった俺である。

一度も女友達のいなかった息子むすこが、いきなり美少女を連れてきたらビビるだろう。

「そうよ。KIOで、戦ってほしい……私のもので、その専門家になつてほしい。あなたの『眼』を使ってね」

「……え」

戦神。KIOにおける、eスポーツ選手にしてプログラマー。俺の憧れの職業。

その誘いが、目の前にある。

いや、俺なんかに務まるとは思えないけど……。俺はなんとなく迷いながら、とりあえず思いついた懸念を口にする。

「でも、それはつまり、この店番ができなくなる……ってことだよな？」

「まあ、そのくらいゲームに専念してもらうのが、前提になります」

俺の問いを絵礼奈は肯定した。

母さんはそれを黙って聞いていた。

もしそうならば、店員は母一人ということになる。

「俺一人だって、店員が抜ければ、この店は困るんじゃない……」

俺は心配を口にした。しかし。

そこに、絵礼奈が致命的なツッコミを入れた。

「——お客さんの呼びかけに応えないで動画見てたの？」

「あ、それ言うの」

「ほお。柊、また店番サボってたわね」

俺はちよつとろたえる。母が口を歪める。

絵礼奈が追い打ちをかける。

「KIOの戦闘動画ですよ？ アレ」

「まあ」

「好きなんですね？ 『不可視の天使』……」

「た、たまに見るだけだよ。たまたまだ——」

「ふふ。興味あるんじゃないんですか？ 戦神。何か迷うことでも？」

「……………」

俺は口をつぐんだ。

俺が戦神に憧れてたのは事実だ。

だがしかし、彼女の言う通り、まさに俺には迷う要素がある。

「……そうだな。これは、言っておいた方がいい」

俺は絵礼奈に向きなおる。

「絵礼奈……さん？ 俺のゲームの腕を買ってくれてるのかもしれないけど……俺は

キルタイム
KITOで上手くやれない理由がある」

「え?」

「俺は……KITOに登録したこともあるんだよ」

「あ、あるんじゃないですか。それなら話が——」

「でもダメだった。だって、俺は。俺には」

若干、言いよどむ。

そりゃそうだ。俺にとってはトラウマみたいな話だ。だが、言わねば。

「『ギフト』が……無いんだ」

「え? 無い……って?」

信じられない、といった顔で絵礼奈は口元に手を当てた。

「そのまんま、無いんだ。(へ無)とだけ書いてあった」

「そんな……ことが」

「もちろんギフトもなしで勝てるはずもない。というか、勝てなかった」

俺は話を続ける。これを知れば、彼女も諦めるかもしれない、と思いつながら……。

「だから俺はKITOを、やめたんだ。戦えないんだよ。そんな俺でも……誘うっていうの?」

「……なるほど」

絵礼奈は事実を受け止め、ぱちくりと両目で瞬きをした。

少し、考えるように彼女は動きを止めた。だがそれも二、三秒のこと。

彼女はすぐに口に当てていた手をパーからグーに変え、考えるポーズのまま言った。

「確かに、それが本当なら……ギフトの提供はKITOのシステムの根幹そのものだもの。

どうにかできるものではないわ」

「ほら、やっぱり——」

「——私以外の人間には、ね」

「……は?」

俺は晒然とした。まるで、絵礼奈ならなんとかできるような言い方だが?

「私には……方法があります。あなたを戦えるようにする方法が」

あまりにありえない内容を、絵礼奈は平然と言いつつた。

「いや……そんな……ことが……」

普通に考えて、信じろっていうほうが無理だろう。

そりゃあ。すべて彼女の言う通りだったら、どんなにいいだろう。

だが現実そんなはずはない。素直に信じられるほど俺はポジティブじゃない。

ギフト、才能のない人間が、生きていける世の中じゃないのだ。

「ふう……ん」

ところが、そこで声を漏らす人間がいた。母さんだ。

「口を挟んでごめんね。何やら迷ってるようだったから」

母さんは親子なのが信じられなくらい明るい顔で言う。

「あなたがKIOを欲しがった時にね、何て言ってたか。母さんは全部覚えてる。だから思い出してほしいと思って。あの時の気持ちを」

言われて、記憶を呼び起こす。あの頃の俺は、目を輝かせて――。

「店のことを心配してくれるのも嬉しいけど……まず考えるべきことは、一つじゃない？」
母さんは指を振り、俺に選択を迫った。

「――そもそも戦神になりたいのか、なりたくないのか」

それは、俺があえて目を背けていた選択だった。

……人は、「理想」を前にすると、かえって尻込みすることがある。

懂れて、なれなくて、距離を置いていたものが、突然また目の前に現れて。

まして、誘ってくれているのは俺の理想そのもの、最強の「エレナ」を名乗る少女。それで混乱した俺はすぐ返事ができず「店長の許可が」とか言ってしまった。

素直に受け入れられなかったのだ。

じゃあ、そういう気持ちを取り払って。ただ素直に考えたら、どうなる？

「……そりゃあ、俺は……」

俺が本当にやりたいことは何だ？

俺が本当になりたいものは何だ？

「俺は」

そんなの、決まってるだろう。

「俺は、戦神に、なりたかった――」

声が出した。言葉にした。

「ギフトが無いとか、店の人手がとか！ 何の制限もしがらみもなければ、全てを賭けてなりたかった」

そうしたら、後から後から、想いがこぼれて止まらなくなった。

「俺にとつての夢。『そのためにだけに生きたい』存在。それが、戦神……だったんだ」
言い切った。全部言った。

久しぶりかもしれない、こんなに喋ったのも。

心の中のクモの巣が、少しずつ消えていく気がした。

「よし。ちょっと歯切れが悪いけど、よく言った」

すると母さんは笑って、手でマルを作った。

「自分の人生でしょう。やりたい事やらしないでどうするの？」

それから母さんは絵礼奈のほうをちらちらと見つつ、

「おまけに、こんな可愛い娘に必要とされている。……なら、応えなきゃ」

「なんで母さんが嬉しそうなんだよ」

「とにかく、なりたいという意志があるのなら。しかもそこに誘われてるなら！

まないなんて、ありえないでしょ」

踏み込

母さんは晴れやかに言った。

「店は私に任せて——行って、きなさい」

まったく、物分かりが良すぎる。さすがはゲーセンの経営者で……俺の親、か。

「……でも、ありがとう」

俺が礼を言うと同様、絵礼奈もうん、と頷いた。

「よかった、断られなくて」

彼女は軽く髪を整えると、何やら改まったように、

「『ゲームは楽しむもの』でしょ？ そんなあなたにこそ……頼みたかったから」

絵礼奈はまたしても正面から俺を見つめ、手を取った。

「私たちは新たな……そして、強いゲーマーを求めている」

「うん」

「あなたには、戦神ストライカーになつてもらおうわ。——それも、最強の」

「最強……」

静かに答えつつ、心の中は疑惑半分、ワクワクも……半分。

なれるのか。マジでなれるのか？

……戦神ストライカー！

絵礼奈は、決意を秘めたまなざしで俺に言った。

「私が、あなたを最強にする。あなたに能力ギフトを与える——女神めがなになるの」

「ギフトを……与える？」

「ええ、与えます。くわしくはゲームの中で」

「そんなうまい話が……本当に……？」

絵礼奈は笑った。母さんも笑っていた。

俺だけがなんか微妙な顔をしていた。

「いやー良かった良かった。……ところで、話を最初に戻してもいいかしら」

母さんが、ハイ、と手をあげた。

「ん？ 最初？」

俺と絵礼奈はピンとこない。母さんはニヒヒと笑い、話を続けた。

「息子は、あなたが貰ってくれるのよね?? 母さん覚えてたわよ」

「えっっっ」

さ、最初ってその話か！

「あ、あの、それは……しまった、そういう話じゃなくてですね、そその」
しどろもどろになりながら、絵礼奈が手をはたはたさせる。

お前もしかして今さら自分の発言の意味に気づいたのか？

最初の落ち着きはどこいったんだよ!?

「大丈夫よ、お母さんは応援するからー」

「わわ私にはそういうのはまだ……ちよつと柇さん!! 助けて……」

「あー、そうなると母さん強引だから。頑張って」

俺はなんだかそれが面白くて、わざと関わらないように目をそらした。

……いずれにしても。

こうして俺は、再び「KETO」に挑むことになった――

らしい。

俺には「ギフト」がない。

本当はない。

絵礼奈はそれを問題ないと言ったが……。

どこか俺はフワフワと現実感のないまま、流されるように、夢の職業に挑む決断をして
いたのだった。

――「あなたに能力を与える――女神になるの」

彼女は言った。

本当だったら最高だ！

ウソだったら最悪だ。

まさしくこの日も、俺にとって運命の日だったのだろう。

俺は彼女に運命をあずけることになった。

いったいどうなるんだろう。

果たしてこの少女……女神か、駄女神か？

「ふう。随分久しぶりだ……けっこう街並みも変わってるなあ！」

K.T.O.内、ログインゲートにて。

俺はアバター「シユウ」となって久々にここを訪れていた。

そこへ少女のアバターが現れる。すごく気さくな感じで現れたが、その姿は、俺のよく知るものだった。

「『エレナ』……！ 本物だったのか」

「嘘だと思ってた？」

長い銀髪。白を基調とした可憐な衣装。

間違はなく、伝説の戦神として知られる『不可

視の天使』エレナ本人がそこにいた。

「まあ、これで証明は済んだでしょ。ちよつと、着替えさせてもらうわね」

しかし伝説の姿を拝めたのもわずかな時間だった。彼女はすぐにアバター設定を変更すると、短い銀髪の簡素な衣装の女性アバターに姿を変えた。



「え、なんで着替えちゃうのさ」

「あ、ああ……へへ。このゲームは自由だからね。戦わない時くらい色々とおシャレ楽しんでるけど、いいと思わない？」

「なるほど、それもそうか」

「じゃあ……シユウ。早速だけど、案内したい場所があるの。ついてきて」

「はいはい、お任せするよ——『女神様』」

俺は彼女の後について歩く。

彼女は、俺のギフトが無いのを「問題ない」と言った。

そしてその上で、最強の戦神にするのだと。

いったいどうするつもりなんだろうか？

「こつちよ」

エレナに手を引かれる形で、俺たちは歩き出した。

ログイン者がまず訪れるログインゲートの周辺は都市エリアとなっており、プレイヤーの往来も多く、活気にあふれている。早くも、俺のテンションも上がり始めたところだ。

「アバターの服屋に、スキル屋、武器屋かー！ やつべ、見てると欲しくなるな」

「そうね、ショップも増えたわ。あと最近は、動画配信が流行ってるわよね」

街の中央にある巨大デイスプレイには、美少女アバターによる生配信が映し出されている。ここでの放送を収入源にしているバーチャル配信者もいるくらいだ。

道端では、自作の音楽を流す作曲家、イラストを掲示する絵師、ダンスを披露するダンサーのアバターもいる。それぞれ、購入することでクリエイターの支援も可能だ。

何しろKIOのゲーム内通貨は、仮想通貨としてリアルマネーと同等の価値があるとされているのだ。完全に、ゲーム内で経済が成立している。

さらに、俺の視界の端にはタイムライン画面が映っている。

【最新！ アリーナランキング速報】

【アバターアイドルSAKURA、新曲発表】

【あさって予定の運営会議で、新任理事を承認へ】

そこでは最新のゲーム内ニュースや、動画やイラストが拡散されていく様子が、延々と流れていた。

「やつぱり来てみると、いい場所ではあるんだよなー！ 楽しみ方も色々だし」

「でしょ？ 誰もが、アバターで理想の自分になれる……そのための材料を与えてもらえるんだから」

エレナは楽しそうにくるりと一回転し、

「私、やっぱりここが好き」
ぼつりと、言葉を宙に浮かせた。

それが俺に向けた言葉なのか、この世界に向けたものなのかは、わからなかった。
「——そういえばさ」

ふいにエレナがこちらを向く。

「シユウは、戦いが上手くないかなくてK.I.O.を離れてたって聞いたけど……ああいうふうに、戦い以外で楽しもうとは思わなかったのかしら？」

「あ……それはね。他のことに興味がなかったわけじゃないけど……やっぱり俺は、戦いたかったんだと思う」

「ふうん」

「ゲームの性^ぶってやつかな。勝負を楽しみたかった」

俺は一言一言、確かめるように、

「でも、ギフトがないとそれはできない」

自分の気持ちを、声に出した。

「だから俺にはこのゲームを『楽しむ資格がない』——そう思ったら、プレイするべきじゃないと思ったんだよ」

「ずいぶん、難しく考えるのね」

「まあ、こだわりだよ。楽しめないのにプレイするっていうのも、ゲームに失礼だろ？」

「そうね——少なくともあなたがゲームを大切に想^{おも}ってることは、わかったわ」

エレナはふふ、と笑って歩みを進めた。

目を細め、花のように笑うその表情は、どこか嬉し^{うれ}そうだった。

彼女は一步、二歩とスキップするように先を行き——

三歩目で、ピタリと止まった。

「……………！」

笑っていた目つきが、鋭いもの^{まろ}に変わる。

「……………うそ、もう……………？ 早すぎる」

エレナはぼつりとつぶやく。どこか緊張^{きんぱう}した声。

「どうした？」

俺が後ろから問いかけるも、返事はない。

ちようど、喧騒^{けんそう}あふれる都市エリアから出たあたりだった。妙に静かだ。

ガサ、ガサと、四方八方から物音が聞こえた、気がした。

「ここは私がやるしか、ない……か」

エレナが、再びつぶやいた。それと同時に。

周囲から、複数の人影が飛び出した！

「エレナ……！」

俺が叫ぶ間にも、人影はエレナに接近し、包囲する。

「——間違いないな、『不可視の天使』だア」

「へへ、こいつアいい。コレを倒せば簡単に名が上がるんだろオ？」

人影は距離をとって動きながら話した。あまりガラの良さそうな感じじゃない。

八人はいるか？ それぞれが武器を構えたり、オーラを右手に集中したりしている。

そして……同時に、前に出た！

「……かかれエ！ へへハア！」

「覚悟しろア！」

「なんだこいつら、バトルしようっていうのか!? こんな大人数で……！」

明らかに、敵意のある襲撃だった。エレナが、襲われる……！！

しかし。その瞬間。

エレナの全身が、輪郭を残したまま一瞬、光る。

そしてその光がおさまると……。

彼女の姿は長い銀髪、白い衣装の戦闘天使に変わっていた。

俺は目をみはる。見覚えのある見た目だ。

「——『神々の時計』」

姿を変えた少女は、何やら単語を告げる。すると。

エレナの姿が消えた。

「……………!?!」

俺は目を疑った。襲撃者たちも同時にざわつく。

だがその時間は、一瞬だった。

「——ぐわあッ!?!」

悲鳴がした。襲撃者の一人が吹き飛ぶ。俺はそこに、なびく銀色の風を見た。

「ちくしょう、何だ!?!」

「やれッ、倒すんだよ！」

二人目が刀を抜き、三人目が腕をやみくもに振り回す。

「だが、まるで間に合っていない。」

「くらえ……つがあッ!?!」

「ぐ、あアッ!」

銀色の風が通り過ぎると、そこにいた男が倒れてゆく。まるで超常現象。

「お……おいおい、『エレナ』……!」

思わず口から言葉が漏れた。俺はこの動きを、知っている。

「マジだ……動画で見た、そのままじゃないか……!」

圧倒的な速度で、誰よりも疾く、誰よりも美しく戦う。

彼女の動きは、目で追うことすらできないほどの神速。

触れることすら叶わぬ、純白の少女アバターを、人々はこう呼んだ。

「『不可視の天使』エレナ……!!」

俺の、憧れの存在。

最近では表舞台から姿を消し、伝説のように語られる噂となっていたが。

かつては「アリーナ」一位の座にもついていた、K.T.O 最速の戦神。

その紛れもなく疑いようもない本物が。目の前で。画面で見たのとまったく同じ動きを

している——!

「く……そ、があッ!」

仲間を倒され悪態をつきながら、右手にオーラを集中していた男が構える。

彼は瞬時に、銀色の風の行く先に狙いを定め……。

「ハアッ!」

オーラを放つ。遠距離の相手を攻撃するギフトだろうか。

——しかし。

「残念ね」

エレナは既にそこにはいない。

男の背後にいる。

「バ……かな」

強烈なキックが入り、男もまた倒れた。これで四人——半数。

「はは、楽勝じゃねーか」

俺は見ていることしかできなかった。残る襲撃者たちもざわつき、一步後ずさった。のだが。

——その直後だった。

「さあ、あなたたち、いい加減あきらめ——ッ!?」
 エレナの声が途切れた。

「——エレナ?」

ふらり、と脚が力を失うのが見える。

「ううっ……………くそッ」

彼女は片手で頭を押さえ、その場に膝をついた。明らかに異常だ。

それを見た襲撃者たちが再び構える。

なぜ急に、エレナがふらついたのか。

あの圧倒的な強さはどうしたのか。

そもそもなぜ、いきなり襲われているのか?

俺には何もわからなかったが……一つだけ、はつきりとわかった。

「なんかわからんけど……とにかくマズい! だろ!」

ということだ。だから考えるより先に、身体が動いた。

俺はエレナのほうに飛び出していた。

うずくまった彼女を抱えこむ。……少女の身体は、小さく震えていた。

その間にも、襲撃者たちはこちらへ襲い掛かってくる。

一番近くにいる一人が、足を振り上げるのが見える。危ない。

だが——瞬間、俺の頭にイメージが走った。右の下段。ローキック。

そうだ。俺には、こいつらが次にどう動くか……わかる。

俺には……『神の眼』がある!!

「……………うおおお!!」

エレナを抱えた俺は敵の攻撃をかわし、ダッシュでその場を逃れた。

「な………にイ!?!」

攻撃をかわされた敵が動揺している。今がチャンスだ。

俺は横へ逃げ、人目につかない路地に駆けこんだ。

運よく、見られずに済んだようだ。

「くっ………捜せ! 手ぶらでは帰れんぞ!」

「『不可視の天使』を持ち帰らねば、あの方に……………」

敵が慌てている。俺は見つからないよう祈りながら、抱えたエレナを見下ろした。

彼女はかろうじて、意識があるようだった。

「じ……………めん、ありがとう……………」

呼吸が荒い。身体は熱く、目尻には涙も見える。

それほどリアルに、このゲームはプレイヤーの様子を反映する。つまりこれは、ゲームの外にいる「天堂絵礼奈」本人の体調が悪いことを意味する。しかし普通、アバターが運動したくらいで人間の息が乱れたりはいない。まして彼女は、わずかなダメージも受けていないのだ。これはいったい？

「やっぱり、持たなかった……かあ」

エレナは中空に言葉を吐いた。

やはりその声には涙が混じっているように……俺には聞こえた。

「だ、大丈夫か？ いったい何が起きたんだ」

「……私のギフト、見たでしょう」

「ああ。——ほんとうに本物、だったんだな」

「はじめっから、そう言ってるじゃん」

エレナは唇だけを歪めて笑った。だが、その口調には少しの余裕もない。

「『神々の時計』——それが、私のギフト。いえ、私が作り上げたギフト」

彼女は苦しげに身を起こし、かろうじて話した。

「とても強力よ。ただし……代償があるの。発動時に、膨大な演算が行われて……その分、使用者の脳に大きな負荷がかかる。激しい疲労や……頭痛を伴ってね」

「じゃあ、今のはそれで……？」

「私は……ちょっと他人より、身体が弱かったみたい。一対一とか、短時間の戦いなら問

題なかったんだけど……ね」

彼女は哀しそうに目を伏せた。

路地の外からは、襲撃者たちの声はまだ遠く聞こえる。

「それで……どうする？ あいつら、まだ俺たちを捜してる」

「うん……ハア、そうね」

エレナは時折苦しそうに息を吐きながら、悩んでいる様子だった。

だが——すぐに意を決したように顔を上げた。

「予定よりだいぶ早すぎるけど、やるしかない……か」

「え？」

エレナはその場に座り込み、俺の手を取った。

それから少しためらうように、ひと呼吸。

そして……意を決したように小さくうなずき、その手を強く引いた。

「エ……レナ？」

この体勢でそうしたらどうなる？

俺の身体はエレナに覆いかぶさる形になる。

大丈夫なの？ これ大丈夫なのか！

「……っ、逆らわないで」

そう言ってエレナはさらに手を引く。

「お、おい」

「密着しないと、バイタルサインが取れないのよ……！ はやく、時間が無いわ」

エレナは片手を引きながら、逆の手も俺の背中に伸ばした。

つまり……エレナは覆いかぶさる俺に、下から、思いきり抱き着いている——！

「……っ、これで、いいんだな？」

彼女の熱、やわらかい身体の感触かんじよく。温かい吐息といき。さらに、鼓動こどう。

リアル肉体じゃあ一度も感じたことのないような感覚が全身を支配する。

少女の身体は時おり脈動し、アバターとはいえない生きているのだ、ということを経期的に

伝えてくる。

逆に、俺の状態は彼女にも伝わっているということでもあるのだが。

俺がガチガチに緊張きんちやうしてるのはたぶんバレてるだろう。

「……はあ、はあっ……！！」



が、彼女はどうかやらそれどころじゃない。無理やり抱き着いてきたエレナは、横を向いて目を閉じ、頬を赤らめながら、何か念じているようだった。

「いったい何を——？　そう思った瞬間だった。最初に見えたのは光だった。」

そして後に続くように、膨大なプログラムコードのような文字列が、エレナの身体からあふれ出す——！

「な、なんだこれは……!?!」

俺が驚くのもおかまいなしに光と文字列はその場で暴れ続け、そして……。勝手に、俺の身体の中に入ってくる！

「え、えええ？」

その状態はしばらく続いた。そして、それがおさまる頃——

「——ふう」

一分ほど経っただろうか。エレナはようやくひと息つき、目を開けた。

「だ、大丈夫か？」

「そうね……結構複雑な処理だったから、ちよっと限界かも」

「突然、何をしたんだよ」

「私たちのアバターを結合して……少々、いじくらせてもらっ……た……」

「え？　アバターを……？　何言ってるんだ、KFOの仕様に詳しいエンジニアにだって、

そんなことできるワケが——！」

「できるのよ。私には、その技術……が……」

言いながら、少女の頭がぐらりと揺れる。

俺はなんとか腕で抱きとめる。

「おい、これでどう状況を打開できるんだ？　おいっ！」

エレナは本当に辛そうだった。が、それを言われずに倒れられたら終わりだ。

「うん。今、説明——」

エレナがかるうじて目を開けた。俺は彼女と目を合わせた。

だが。それと同時に……

俺たち二人の身体に、影が落ちた。

「へえ。この状況を、打開するってえ？」

聞き慣れぬ声。さつきの襲撃者——！

男が一人、路地の入口からこちらを見ている。見つかった。まずい。まずいどころじゃない。

「くそっ。万事休すか……!!」

俺はとにかくエレナをかばうように立った。

だが戦って勝てるとはとても思えない。

俺はギフトなし、ここまで全敗だ。時間稼ぎにもなるか怪しい。

「教えてくれよオ、どう打開するんだ？ 足掻いてみろっつてエ！」

怪しい男が一步踏み込む。俺は勇気だけで身構える。

男が右手を前に出した。何か来る？

くそっ。どうすれば。どうすれば！

「……………シユウ」

その時。後ろから、消え入りそうな少女の声。

「ギフトを」

俺は目だけで後ろを見た。座り込んだ少女が息も絶え絶えに、俺に訴える。

「ギフトを……使って……!!」

——は？

俺は最初、その言葉が理解できなかった。

何言ってるんだよ。そのギフトがないんだからね!?

あるなら最初から——

そう思って画面右上のスキル欄を見た。

そこで俺は目を疑った。

「これは」

「オーイ、何もしねえのか？ しねえならいいよな！ 俺がもうぜ『不可視の天使』！」

男が前が出る！

そのタイミングで。俺は念じた。

——「ギヤアアアアアアアア!!」

奇声！ それと同時に、男が路地から吹き飛んだ！

俺は、前に出した自分の右足を見た。確かに、キックが出せている。

男と俺の間には少し距離があったはずだ。こんな一瞬でキックが当たるはずがない。だが、当たった。その一瞬で俺が接近して足を出したからだ。

普通そんなことはできない。当然不可能だ。それを可能にするものがあるとなれば。

——ギフトだ。

俺は視界の端を確認する。そこにはウインドウが浮かび上がり、スキルの発動を知らせていた。

「神々の時計」LEVEL 1〈コンセントレイト〉

「ギフト……！ 俺に……ギフトが……!?!」

この時の俺の感情を説明するのは難しい。

喜び、驚き、混乱、心がバラバラにあちこち動いて、グルグル回った。

……何より敵は、感慨に浸る暇など与えてはくれない。

「——何だ!?!」

「見つけたのか!?!」

「一人やられただど!?! 奴は消耗していたハズ……」

残る敵は三人。あつという間にこちらへ集まってくる。

くそつ、路地から出るしかない。動けないエレナを狙われたら終わりだ。

——襲撃者の視線が、俺に集まる。

「……何だ？ 自分から出てきたぞ」

「『不可視の天使』だけ逃がされたか？ それなら追わなきゃならんぞ、面倒臭え」

「なら、そいつを捕まえて尋問すりゃいいだろ。人質としても使える」

「なるほど、確かに」

彼らはそのように会話をかわし、それから俺に呼びかけた。

「おい、お前。『天使』を渡せ」

高圧的な態度だ。俺は目をそらさず、言い返してやる。

「言われて渡すと思ってるのか？ ……突然襲ってくるような奴らに?」

——正直、虚勢だ。

敵はカチンときたようで、怒り混じりの笑いを浮かべた。

「ああ!? ……ハハハ、おいおい。随分ナメた口をきくじゃねーか」

「『天使』の後ろで棒立ちしてたガキが。調子に乗るなよ」

「お供のザコが、まさか三人相手にやるつもりかアア?」

三人の敵が身構えた。来る。

「ぶっ潰してやるああ!!」

やるしかない。俺が。もう一度……!

そして俺は、ギフトの発動を念じた。

——「神々の時計」LEVEL. 1〈コンセントレイト〉

その瞬間。時の流れが鈍化した。

周囲のすべてが、スローモーションで動く。

「な……るほど」

俺は地面を蹴って駆け出す。ゆっくりな景色の中、俺だけが普通に動く。

俺の身体の周りには、プログラムコードのような、不可思議な文字の羅列が走り抜けていた。

それは超速で駆ける『不可視の天使』エレナと、まったく同じエフェクト。

まさに俺だけが今、世界の時の流れから切り取られた存在——!

三人の敵は、俺が動いたことを察知し、それぞれに動き出している。

その姿を視界に入れた瞬間。

俺は、未来の景色を見た。

「これは——!」

一人目は双剣を抜き放ち、十字斬を繰り返す。

二人目は全身を岩で覆い、ゴーレムに姿を変える。

三人目は竜人だ。大きな口からファイアブレスを浴びせる!

もちろん、今こうなっているワケではない。俺が実際に見たのはその予兆。

だが。予兆を見れば何が起こるかはわかるんだ。

——「眼」を鍛えた俺には!

「わかるぞ。どこを攻撃すればいいか……!」

俺は黒い疾風となって、三人の間を縫うように動いた。

そしてブレイキをかけながら停止。続けてギフトを、解除した。時間が、戻る。

「『グ……グワアアアア……ッ!?』」

直後！ 三人の断末魔だんまつまの声が重なった。

一人目は双剣を抜くことすらできず両手を破壊はかいされ、

二人目は全身を岩で覆いきる前にみぞおちに打撃を叩き込まれ、

三人目は炎が口から出る前にアゴを蹴り上げられた。

行き場を失った炎が、口の中で爆発する——！

——BOMB!!

派手な爆発音とともに、三人の倒れる音が響いた。

「ハア、ハア。出来た……!」

言いながら。俺はどうしようもなく高揚こうようしていた。

確かに、今までも相手の行動が読めることはあった。

だがこれは違う。周りの時間がゆっくりになったことで、より完璧かんぺきに未来を視た。

「な、何だこいつは？ つ、つつ強すぎる——!」

「これじゃ『天使』より速いじゃねえか！ どうなってやがる!？」

「な、なんでこんなのが二人もいるんだ！ 聞いてない!」

「む……無理だア！ 逃げよう、逃げるしかねえよオ！」

まだHPが残っていたか。しかし、力の差は理解してもらえたようだ。

最初に倒したのも含めた四人は急いで起き上がると、大慌おほあわてで逃げ出していった。

エレナが倒した四人も、すでにいないようだ。先に逃げたか？

「おい、待……!」

俺は呼び止めようとした。何で襲おそわれたのかすら、まだわかっちゃいない。

だが……それ以上、言葉が出なかった。視界がぐらりと揺れる。

「——つとお!？」

フラツと足元がよろめき、身体が傾く。なんだ、これは……?!

重力に逆らえない。倒れかかった俺の頭は——少女の胸元に抱きとめられた。

「……そこまでにしとこう！ 無理しないで。お疲れ様」

「……エレナ」

いつのまにか起き上がったエレナが、すぐそばまで来ていた。

「すごい……すごいわ。信じられないよ」

彼女は少し興奮気味に、息をはずませた。

少し休んだからか、多少は元気になったようだ。

「まさか勝っちゃうなんて……渡したギフトを、いきなりあんなに使いこなすなんて！」

「お、おいおい。そんな興奮して大丈夫なの？」

エレナの胸に抱かれているのが恥ずかしく、慌てて離れる。そして、確認する。

「やっぱり……そうか。エレナ、あの時俺にギフトを……『渡した』？」

「うん……そう」

「そ……そりゃいきなりだね」

「私の『神々の時計』を……引き継いでもらった。ぶっつけだったけど、上手くいったね」

「まだ信じられないよ。そんなこと、できるもんなの？」

「そうね……私は、あなたがいうところの『KITOの仕様』に詳しいエンジニアを超えてるみたいだから」

「え？ そんなの初耳——」

「言ったでしょ？ 私以外には無理だ、って」

エレナは得意げにウインクした。

「はは。無事勝てたからよかったけどね……」

「無事、どころじゃないよ!!」

俺の言葉に、エレナはさらにテンションを上げて反応した。

「私ですら、相手に攻撃されてから、かわしてたんだよ？ それを……攻撃すらさせずに、先手で潰した！ いったいどうやったの!? 未来が見えてるとしか——あ」

そこまで言って、彼女は気が付いたのだろう。

「『神の眼』……!」

「うん。……手ごたえは、あったよ」

俺は感慨深げに手を握ってみせた。

「いきなりだけど、楽しかった……なあ。ははは。これがギフトを使った戦闘……!」
すると、俺を見るエレナの瞳がうるんだ。

「私の目は間違ってたなかった。やっぱり……やっぱりあなたは『強いゲーマー』だった!」

「そんなに、かよ」

「そんなにだよ!」

エレナは力強くうなずいた。

「『神の眼』の噂を聞いた時、この人なら、と思った。慣れてるゲームとは勝手が違うだろうけど——『読み合い』は特定のゲームによらない力。絶対こ、つちでも強いだろうって」
彼女は心なしか、声はずませて語る。

「それはK110の外とはいえ、シユウがずっと磨いてきた……あなたの武器なの。『神々の時計』と、並ぶくらいのね」

胸の内が少し温かくて、なんだかかむすがゆい。

そうだ。自分の力を認められるっていうのは——こんなに、いいものだったんだな。

俺はずっと「持たざる者」だと、そう思っていたから。

——無駄じゃ、なかったんだ。

K110から目を背けて腐っていた、長い長い時間。

俺にとっては時が止まっていたようなあの期間は。

いつのまにか俺に『眼』という力を与えてくれていたんだ。

あの『不可視の天使』に称えられるほどの力を——！

「やっぱり、あなたに頼むしかないわね」

彼女はあらためて力強く言った。

「頼む？ 俺を戦神にするっていう、あの話？」

「そうね……それもあるけど、それだけじゃない」

エレナは歩き出しながら、楽しげに指を振る。

あ、もう体調はいいのかな。それならいいのだけだ。

エレナはこちらを振り向き、目を細めて笑いながら。

「ねえ。シユウ」

俺に、手を差し出した。

「私と一緒に——『この世界』をひっくり返さない？」

周囲は、無音。乾いた郊外の風が、少しの砂埃を巻き上げる。

「は？ そりゃ、どういう——」

遅れて、なんとか俺はそれだけ返事した。

「そのままの意味よ」

風がエレナの美しい銀髪をなびかせる。

そう、この世界では風すら吹く。そこまでリアリティを追求された「第二の世界」。

そこに立つエレナという美少女は、現実と同じように……いや、ひよっとすると現実以上に存在感のある輝きを放っている。

彼女の恍惚とした笑みに、思わず見とれて引き込まれそうになる。

「強さ、モチベ、ゲームに対する姿勢……申し分ないわ。あなたなら『奴ら』も怖くない」

「奴らって？」

「おねがい！ ギフトも渡したことだし……よろしく、ね？」

「ひとつも質問に答えてもらってないんだけど……？」

「そうと決まれば、ついてきて！ 私たちのホームへ案内するわ」

「あ、これ話聞いてもらえないやつだな？ ちくしょう」

エレナは先ほどの消耗が嘘のように歩き出し、俺はそれに続いた。

ついていくしかないだろう。何しろ俺はもう——力を得たんだ。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で！

©Tabibito Watashiba, Yunagi 2020